
『キミガスキ』

想

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『キミガスキ』

【Nコード】

N2666J

【作者名】

想

【あらすじ】

手が触れ合ったその瞬間、響に恋した基樹。

告白、そして二人のそれから。

「告白」

ころりと消しゴムが机から転がり落ちる。

響は反射的にそれを拾った。

「あ…わりい。どーも」

基樹は受け取ろうと手を差し出す。

「どういたしまして」

そう言って、響は基樹の掌に消しゴムを置いた。

その時、微かに触れ合った肌に、基樹は言い様のない感情を覚えた。

2

それから二年後の春。校舎裏の桜の木の下に、基樹は響を呼び出した。

「俺、あんたのこと好きなんだけど」

基樹と響の間に、一陣の風がさっと通り過ぎる。

「……………僕は男です
ので。じゃ」

「っ！…！ちよつと待て！…！」

去って行くこうとする響の腕を、基樹が乱暴に掴んだ。

響は怪訝そうに縁のない眼鏡を押し上げる。

「まだ何か？」

「人の一世一代の告白に、なんつーリアクションだ！…！！？」

「そう言われても…。あなたが勝手にしたことじゃないですか」

「そ…それは」

「それから、僕は男だから無理という反応、非常に理にかなってま
せんか？」

響の言葉に、基樹はぎつと唇を噛みしめた。

「…じゃあ、俺があんたのこと好きっていう感情は、理にかなって
ねえってことかよ！？」

それまで無表情だった響の顔に、困惑の色が滲んだ。

「俺はずっとずっとあんたのことが好きだったんだ！ワリいか！…！」

感情が昂って、基樹の目頭があつくなる。

「誰も…悪い、とは言っていないんですが」

「うるせえっ！！」

「まったく…」

目尻にたまった涙の粒を隠すために俯いていた基樹の顎に、ふと響の手が伸びる。

ぐいと顔を持ち上げられて、響の方を向かされた。

突然の事態に、基樹は赤らんだ目を丸くした。

そうしているうちに桜の木に体が押し付けられた。

いつの間にか、響の片手が腰に回されている。

「なッ…なんだよ!!！」

声の上擦る。

響はくすと笑うと、基樹に口づけた。

基樹が目をむいて響の背中を叩いて抗議するが、聞き入れられない。そのうち、固く閉じた基樹のそれを響が啄むようにすると、徐々に体の力が抜けた。

気がつくくと、基樹は夢中になって響の唇に応じていた。

響が唇を離す度、基樹の口から吐息が漏れる。

基樹の中に響の舌が入ってきて、甘く撫でると、基樹は膝から崩れ落ちた。

とっさに響の手が基樹の身体を抱きとめる。

「顔に似合わず随分純心で…正直驚きました」

響は苦笑して、基樹の耳元で囁いた。

基樹は赤くなる。

「うるせえ…！中村、一体何のつもりだ！？意味分かんねえ…！！」

響は軽く蔑むように基樹を見やる。

「この状況で分からない？…じゃあ、鈍い頭でよく考えることですな」

「おまつ…！！」

「早くしないと帰りますよ」

そう言っつて基樹の身体から離れてしまおうとする。

基樹は慌てて響の背中に腕を回して、それを阻んだ。

「…つまり、こうしていいってことか？」

「なあ」

「~~~~っ！ワケ分かんねえ…！！」

「あんまり大きい声出さないでくれますか？」

「あ、ワリ…って違うっ！！時間無駄にしたくなきゃ、話をそ…」

基樹の言葉を響のキスが塞いだ。

「じゃ、単刀直入に。僕もあなたが好きみたいです」

響のセリフに、基樹の頭は真っ白になる。

ただただ嬉しさが込み上げて、基樹は響の背中に回した腕に力を込めた。

「バイオリン・ソナタとキミ」

昼下がり。

音楽室。

バイオリンの奏でる音。

高校生活中、何よりも心地よい時間だった。

音楽室の隅に置かれた掲示用の衝立の裏。

昼休みはここが基樹の居場所だった。

それはなにも、不良のような見た目と言動でクラスから孤立しているせいではない。

確かにそれは事実なのだが、一匹狼が性に合っているし、基樹は全く気にしていなかった。

ーガラッ。

音楽室の扉が開き、誰かが入って来た。

確認しなくても、それが誰なのかを基樹は知っている。

それから何をするのかも。

きつといつも通り、楽譜や楽器をゆったり準備して、そしてー。

中村響はバイオリンを構えて鋭く息を吸うと、弓を動かした。

やっぱり、いつもの曲だ。

コンサートで演奏するとかで、最近はこの曲ばかり弾いている。

基樹は衝立に身を預けて演奏に聴き入った。

速いパッセージを丁寧に追いかける指。

伸びやかなバイオリンの音色。

情感豊かに音楽を紡いでいくその表現力。

クラシックどころか、音楽自体に素養がない基樹でも、響の演奏の
凄さは分かる気がした。

響が奏でる音には、人を惹き付ける力がある。

基樹もいつの間にかそれに引き込まれていた。

「これ、何て曲なんだろ。」

響が弾き込むこの曲の名を知りたい。

ぼんやりとそう思った時、

「あっ！」

「！！！」

響が突然声をあげて楽器を下げた。

「バ…バレたか？」

その場合どうしようかと、基樹はバクバクと音をたてる心臓を押さえつけ、思考回路を必死に回転させた。

しかし響は基樹の方に目もくれず、首をひねって楽譜を見詰めるだけだった。

どうやら基樹に気がついたわけではなさそうだ。

基樹は胸を撫で下ろす。

しばらく楽譜を睨み付けていた響だったが、ふと不敵な笑みを浮かべた。

「やっぱりベートーベンのバイオリン・ソナタは一筋縄じゃいかな
いか…面白い」

そう言っつて響は、また続きを弾き始めた。

ーベートーベンのバイオリン・ソナタ…

基樹はそれを忘れないよう響の奏でる音と共に、心にしっかりと刻みこんだ。

この空間、この時間を響と共有していたことを記憶してくれる、特別な曲だから。

ーこの曲を聞くたび、俺は“今”を思い出せる。

高校を卒業して、もう中村と会えなくなっても、大切な記憶はこうやって失われない。

そう自分に言い聞かせた。

叶わない恋に一抹の哀しみを感じながら、基樹は響のバイオリンに再び耳を傾けた。

聞き覚えのある曲がリビングから流れってくる。
懐かしさが込み上げてきて、基樹は思わず包丁を握ったまま台所を飛び出した。

基樹がリビングに入ると、響はソファにもたれて目を閉じていた。

「おい、響」

基樹の呼びかけに、響が薄目を開ける。

「…お前は僕を刺し殺しに来たのか？」

「そのつもりなら起こさねえよ。ってそれよりこの曲!」

基樹はびしっと包丁をCDコンポに向けた。

「ベートーベンのバイオリン・ソナタだよな。もしかして演奏会でやんの?」

響は一瞬目を丸くして、それから堰を切ったように笑いだした。

「は?なんで笑うんだよ」

身に覚えのないことで笑われ、ふてくされる基樹を見て、響は更に

笑う。

いい加減、包丁で刺してやろうかなどと考えていると、漸く響の笑いがおさまった。

「はは…悪い悪い」

響は眼鏡を外し、笑い過ぎて零れた涙を拭う。

「あのさ、この曲、メンデルスゾーンのバイオリン・ソナタなんだからけど？」

「は！？だってお前が言ってたんじゃないか!?!」

不満顔で抗議した基樹を、響がにやにやと眺める。

「いつどこで？」

「高校ん時に音楽室で!?!?!あ」

何かに気が付いて、基樹の顔がみるみる青ざめた。

「まさか、響、おまえ…わざと?」

「1」明察」

「…で…ことは…」

「…いつ、俺に気付いてた…?」

「その通り」

「心読むなっ!!」

「いや、口に出してたから。昔からだよな、そのクセ」

「え…。まさか、あん時も…?」

今度は青い顔に一気に血がのぼる。

そんな基樹の様子を見て、響は楽しそうに笑っている。

基樹は恥ずかしすぎて、穴があつたら速攻で入りたい気分になった。

「で…気付いてたってことは…」

「基樹の好意は、告白される前から知ってたってことかな」

付き合って五年目にしての真実を、響はあっさり言っただけだ。

基樹の中で、片思い中の思い出が走馬灯のように駆け巡る。

音楽室の一件は二年生の時のことだから、ずっと響は…。

そこまで考えて、基樹は恥ずかしくて死にそうになった。

「だから告白の時…。いやあの時のことはもういい!てか、俺に気付いてたんなら何で無視してんだよ!？」

照れを隠したくて、わざと語気を荒げる。

それを見透かしたように響は口の端を曲げた。

「お前の性格上、話し掛けたら来なくなっただろ、絶対。たとえ基樹みたいな客でも、いるほうが演奏のチベーション上がるしな」

「基樹みたいになって何だよ!？」

「言葉の通りだけだ」

「…前から薄々感じてたけど、おまえ、性格悪いよな…」

精一杯の皮肉をこめるが、

「今更？」

と軽くあしらわれるのはいつものことだ。

「…まったく可愛いげのない奴だな…本当に刺すぞ、コラ」

基樹は顔をひきつらせ、悪戯半分に包丁を響に向けた。

「わ〜こわ〜い」

響はわざとらしくそう言っつて、身を抜って怖がる振りをする。その様子があまりに面白くて、基樹は思わず破顔してしまった。キツイ顔立ちの基樹も、笑うと愛嬌のある柔和な印象になる。

それを見て、ふと響が真顔になる。

「基樹」

「ん？」

「包丁置いて」

「何で？」

響はそれに答えず、基樹の腕を引いてソファに押し倒した。

「てめっ、バカか！！危ねーだろうがっ！！！！！」

響の手が喚く基樹から包丁を取り上げる。

「だから言っただろ？置けっ」

「じゃあ置くまで待てよ！」

「待てなかった。笑顔、可愛いくて」

「ばっ…んっ」

何か言いかけた基樹の口を、響は素早く塞いだ。

そのまま深く唇を重ねる。

基樹も素直にそれに応じた。

メンデルスゾーンのバイオリン・ソナタが鳴り響く中で、息を継ぐ間もないほど、二人はお互いの唇を求め合った。

「んっ…は…、響」

響は基樹の上衣を脱がせて、首筋に口づけた。

鬱血するほど強く吸って、基樹の身体に痕を残す。

その度、基樹がびくびくと震えるのが可愛くて、響は執拗に首筋を攻めた。

その一方で、ぷつんと立つ粒を片手で弄ってやると、基樹は目を潤ませ、響の背にしがみついていた。

「ここ、気持ちいいの？」

そう言って、粒を弾いてやる。

「あっ……」

「気持ちいいんだな？」

「うっ……」

響は恥ずかしげに目を背ける基樹の顔を両手で挟み、自分の顔と無理矢理合わせる。

「ちゃんと言えよ……イイの？」

「……ほんと、おまえ、性格悪い」

「それ、誉め言葉だよ」

「ちがつ……うあっ」

言葉の途中、突然粒を舐めあげられ、基樹が大きく喘いだ。ピンク色のそれは、響の唾液でいやらしく光っていて、基樹は益々恥ずかしくなった。

響は容赦なく舌で、手で刺激を加えてきたので、どうしようもない快感がせり上がってくる。

「響…やばい…」

無言で、響の片手が基樹の粒を苛めるのを止めた。

それを下に伸ばして、響は基樹に触れる。

基樹のそれは、既にジーパンがきつくなるほど屹立していた。

「早いな」

「…つるせえ」

そう言った基樹の言葉に力はない。

響はくすぐすと笑いながら慣れた手つきで基樹の下衣を剥ぎ取ると、熱を持って立ち上がったそれに触れた。

「…っ、はっ…あぁっ…」

与えられる刺激に、基樹は息を乱して喘ぐことしか出来なかった。

響の愛撫は、楽器を扱うように丁寧だ。

そして的確に基樹の感じる所を攻めた。

一段と芯を持った基樹のそれからは、透明の液体が溢れ出して、響の手を濡らす。

響はその滑りを使って、さらに愛撫を続けた。

神経が剥き出しの敏感な部分を擦られて、基樹の身体の中心がジンと疼く。

「ひ…響、もう…でる」

「いいよ、イって」

「ふっ…あっ…んあっ」

快感にびくびくと震えながら、基樹は果てた。白濁の体液が基樹の腹部を、響の手を汚す。

響はそれをすくい、固く閉じた入口に塗った。

「基樹、もっと脚開いて」

「ん…」

基樹は素直に脚を開く。

自分からそうするのに羞恥心はあったが、響を欲する欲望が勝った。

「…いい子だな」

からかう響の言葉に抵抗する気もない。

「…響、早くしろ…」

「分かったよ」

その言葉とは裏腹に、響は焦らすようにそこを撫でる。中途半端な快感に耐えられず、基樹は腰を浮かした。

「何？催促？」

「…ちがうっ」

響が意地悪く笑う。

指は変わらず入口を擦るだけだ。

基樹自身は、また熱を持って液体を溢し始めていた。熱に浮かされ頭がおかしくなりそうで、基樹は涙ぐんだ。

「響っ…挿れて…」

堪えきれず訴える。

響は基樹の目尻にたまった涙を拭って、軽く口づけた。

「よく言えました」

言い終えないうちに、基樹の内部に響の指が侵入してくる。

散々焦らされて敏感になつた基樹の内壁を、お構いなしに掻き乱す。基樹は押し寄せる快感の波に溺れた。

「基樹、挿れるけど」

「っ…はあ…聞かなくていい…」

「一応。後から文句言われるのは嫌だから」

「っ、早く挿れるよっ!」

「…了解」

響の指が引き抜かれた。

両手であつちりと腰を掴まえられる。

入口に、熱いものが触れたと感じた次の瞬間には、基樹の中を響の欲望が貫いていた。

その衝撃の強さに、基樹は思わず響の背中にしがみついた。

「ああ、っあ、んっ、んっ」

何度も何度も穿たれて、快感に意識が遠退く。

響も目を細めて、微かに息を乱しながら基樹の中を犯した。

「基樹…」

響のものが引き抜かたかと思うと、ずんと最奥を突かれ、頭の中に閃光が走った。

「んあ…」

腹の奥にじわりと温かいものが広がる。

響が果てたのに数拍遅れて、基樹のそれもはぜた。

バイオリン・ソナタも丁度終盤を迎えたところだった。

基樹は滲む意識の中でそれを聴いた。

今までは、あの音楽室の思い出を秘めた大切な、それでいて片思いの切なさを蘇らせる曲だった。

そして、今またこの幸せな時間が上書きされる。

基樹はそれがたまらなく嬉しかった。

「響…愛してる」

疲れはて、基樹の肩に凭れる響の頭を撫でつつ、そっと囁く。

響は無言で、基樹を強く抱きしめた。

「バイオリン・ソナタとオマエ」

初めて君に気付いたのは

演奏がどうしても上手くいかなくて

柄にもなく落ち込んでいたあの日

「？」

音楽室に入った途端、中村響は異変に気が付いた。

掲示用の衝立の端から、ほんの少しだけ学生服と明るい茶髪がのぞいていた。

明らかに誰がいる。

「誰？」

声を掛けてみても反応はない。

耳をすますと小さな寝息がきこえた。

どこのどいつか知らないが、音楽室を仮眠場所として利用する不届者を、響は黙って見過ごす訳にはいかなかった。

とりあえず、いつも通り楽譜と楽器を準備した。

そして、バイオリンを顎と肩の間に挟んで弓を構える。

「すっ」

響は鋭く息を吸い込んだ。

と同時に、弦にあてた弓を滑らせる。

ギイイイイツ！！！！

不協和音が大音響で発せられた。

しかも、そこそこ反響する部屋だから、いつまでもわんわんとうるさく鳴る。

自分でやっておいて、不快な音に気分が悪くなる。

それでも響は、音が出た瞬間、そいつの身体がびくりと跳ねたのを見逃さなかった。

幸いなことに、どうやら衝立の後ろの男を叩き起こすだけの効果はあったようだ。

これでさっさと音楽室から出ていくだろうと響はたかをくくっていた。

がしかしー

予想に反して、茶髪は衝立の後ろに引っ込んだまま、いつまでも出てこようとしない。

といつても寝息はきこえないから、眠っているわけではなさそうだ。

もしかして、僕の演奏を待ってるのか？いや、でも…そんなはずは…

ぐるぐると考えを巡らせているうちに、響はもじもじでもよくなってきた。

聴きたいなら、聴かせてやればいい。

この僕の音楽を。

ただ、眠るのは許さないけど。

「バイオリン・ソナタとオマエ」（後書き）

「…アレ、わざとだったのか…」

「当たり前だろ？おまえ…この僕があんな音、意識しないで出せる
と思ってたのか？」

「怖い怖い顔怖い」

「まったく、おまえが居眠りこく度にわざわざ起こしてやってたんだ
から、感謝されこそすれ…」

「つーかさ、俺がいつつもいるって気が付いたのはいつだよ？この
話だと、まだ確信してなかったみたいじゃん？」

「ああ。基樹が昼休みに僕に見つからないようにコソコソ音楽室に
入ってくのを数回見かけて確信したね。こいつ、やっぱり僕の演奏
目当てだって」

「演奏目当て…まあ、強ち間違ってはいねえけど…」

「まさか演奏じゃなくて、僕目当てだったって言いたいのか？」

「え…いや、その」

「非常に複雑な気分だが…何か腹立つ」

「…って何で俺の腕押さえつけてんだ!？」

「僕を腹立たせた罰だよ」

「理不尽だっ！！」

「暴れるな、大人しくしてれば…ふふん」

「わっわっ！やめる〜！！」

「この後の展開はご想像にお任せします」

「登場人物紹介？」

【中村響】ナカノキ

23歳

高校は大学付属で、大学までエスカレーター式。
高校、大学と音楽科でバイオリンを専攻。県所有の交響楽団に就職。

身長180 / 体重68。

視力が悪く、縁なしメガネは必需品。

髪は薄茶色の短髪。優等生っぽいとよく言われる。

Y交響楽団のヨン様と呼ばれるように…。響は断じて認めていない。

おっとりして爽やかな表の顔とは裏腹にDS。

攻。

【沢島基樹】モトキ

23歳

大学には行かず、専門学校へ。

2年前から実家の美容院で働き始める。

身長177 / 体重65

髪は金に近い茶色。

目付きが悪く、言葉遣いが乱雑なので不良っぽく見えるが、根はしっかりした青年。

常に一匹狼。

高校時代、クラスが入り乱れる選択授業の際、響に出会い惚れる。

自分はSだと思っているが、響のDっぷりに自信がなくなるばかり。

受。

「オマエの手で？」

基樹、美容理容専門学校1年目

響、音大1年目の夏

基樹の家にて

何とはなしにベッドに寝転ぶ基樹の目に留まったのは、響のさらりとした髪の毛だった。ベッドに寄りかかって雑誌を読んでいるから、形の良い後頭部がこちらを向いている。

「なあ、中村」

「んー？」

基樹の手が、ぱらぱらと伸びた響の襟足を掠める。

「髪、伸びてる」

「ああ」

響は読んでいた雑誌から顔をあげて、前髪の端を摘まんだ。

「そういえば、この前切ってから結構経ってるかも」

「じゃあ！…あのさ…」

基樹はベッドから跳ね起きてそう切り出した。

だが、なかなか言葉が続かない。

響は訝しげに基樹の方を向いた。

「言いかけてやめるなよ」

「だって…」

「さっさと言わないと帰るから」

響は意地悪く口の端を曲げた。

それでも基樹はしばらく躊躇って、響を僅かに苛つかせる。

顔に似合わず、基樹にはこういふところがあつた。優柔不断というか女々しいというか…。

「中村の髪、俺に切らせてくれねえか？」

「…」

まあ、こういふ予想外の不意打ち発言で全て帳消しになるのだが。

しかし、ここで素直に喜ぶような心根を響は持ち合わせてはいなかった。

息を飲んで答えを待つ基樹を、響は呆れ顔で見返す。

「それは僕に練習台になれってことか？」

「なっ、ちがっ…」

「違うことあるか。専門学校に行ってると言っても、お前はまだまだ、研修生見習いだろっが」

「研修生以下かよ！ってそうじゃなくてっ！俺は…」

基樹が言葉を飲み込んで視線を下げた。

それから、ごによごによと消え入るような声で続ける。

「…他の奴に中村の髪、触られるのが許せねえ」

「バカ」

響は刹那の速さでそう言っつて、基樹の顔を覗き込む。

そこには困ったような表情の、真っ赤な顔があった。

それを見た響の心中に、何かが込み上げてきた。

「やっぱり…嫌だよな」

そんな風に、あからさまに残念そうに言われて、どうして断れるだろっつ。

「…別にいいけど」

「え」

基樹の頭が上がる。

丸い目が、響を見つめた。

「…いいって…」

「切って、いい。何度も言わせるな」

響はふいと基樹から顔を背けた。

「オマエの手で？」

沢島美容院は建物の一階部分に店舗がある。今日は定休日だから、白いタイル張りのフロアはしんと静まりかえっていた。こつこつと、二人分の足音だけが響く。

「中村、ここ、座って」

そう言っただけで基樹は空色の椅子を一つ示す。

響は軽く頷いて、それに身を預けた。

前方に据えられた鏡に、自分の姿が映し出される。

それに思わず苦笑が込み上げた。

「沢島の言う通り、結構伸びてる…。」

自分自身さして気にも留めていなかったことだ。

それなのに、基樹は敏感に気が付いてくれた。

悪い気はしない。

響は笑みを浮かべて、基樹が準備している姿を鏡越しに眺める。

美容師になろうとしているのだから、当たり前なのかもしれない。

そうかもしれないが、自分をよく見せているのだと、自惚れるのは自由だろう。

基樹がよしと小さく呟いて響を向いたから、こぼれそうになる笑みを瞬時に引っ込めた。

「中村、髪濡らすからメガネとって」

「ああ」

響はメガネを外して鏡台に置いた。それから、あまり良く見えない目を凝らして、鏡の中の基樹をじっと見詰めた。

「…くれぐれも失敗はするなよ」

「わーってるよ」

基樹は白い布をばさりと響にかけた。

「苦しくない？」

「ああ」

「そんなら中村、どんな感じに切る？」

そう訊ねながら、基樹は響の髪をしつとりと濡らしていく。

その手つきは壊れ物を扱うように丁寧だ。

その心地よさに、響の心臓は柄にもなく大きな鼓動をたてた。

「好きにしている。ただし、僕が気に入るようにな」

そんな風にどきまぎしているのを知られまいと、響は平静を装って答えた。

それに対して、鏡に映る基樹の顔が苦笑した。

「素直に、任せる、でいいじゃねえか」

「任せる、だとプレッシャーにならないだろう」

「はいはい」

含み笑いをして、基樹は響の後ろ髪を一房、掬い上げる。

「じゃ、始めるぞ」

「ああ」

響はそう言ってゆっくりと目を閉じた。

カシャ、と基樹がハサミを取り上げる音が耳を打った。

「なあ、何でずっと目えつぶってんだよ？」

しばらくカットに集中していた基樹が、響の耳元で言った。

響は敢えて聞こえないふりをする。

「…何だよ、寝てんのか？」

基樹は呟いて、こめかみあたりの髪を切り始める。

「俺の雄姿見ねえで寝るとはな」

苦笑交じりの基樹の言葉。

響は、……だって、と心中でほくそ笑んだ。

おもむろに響は目を見開く。

それに驚いた様子の基樹の姿を一瞥し、自分の髪を切る手を捕まえる。

それから基樹を引き寄せて、そっと触れるくらいのキスをした。

「なあっ…!？」

面食らった表情の基樹に、響は口の端を曲げて笑う。

一生懸命な基樹の姿を見ていたら、理性がもたない。

こんなことが裂けても言えないから、響は何事もなかったかのようになり再び瞼を下げた。

「オマエは僕の髪を他人に触られたくないって言ったな。」

「僕だって、オマエ以外の奴に髪を触られるのは、ごめんだ。」

「オマエの手で？」（後書き）

「響」

「ん？」

「明日、定演だろ。切っとく？」

「ああ、風呂上がったら頼む」

「何なら風呂で切ってやるか？」

「襲うが？」

「……！さっさと入ってきやがれ！」

「はいはい」

ま、どっちにしる後で…。

響は笑みを隠して風呂場に向かった。

「演奏会とキミ プロローグ」演奏会とオマエ」

高校2年

夏の定期演奏会から

僕に花束が届くようになった

毎度毎度

およそ男がもらうのには似つかわしくない
可愛い小さい花束

生花店からの直送で

差出人は匿名

みんなは面白がって

「謎の花束事件」
なんて言ってた

演奏会は年に5回

ソロリサیتال

高校のオーケストラの定期演奏会が夏冬

大学のオーケストラのエキストラ、夏冬

高校2、3年

通算10回

全部の演奏会に届いた

誰の仕業か

もうお気付きだろう

そう

もちろん

あの

愛すべき

不良バカの仕業だ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2666j/>

『キミガスキ』

2010年10月8日15時06分発行